

## 19、 感 想 文

山田 博司

まず最初に、5年前のスウェーデン・デンマーク視察にも参加させていただき、今回も参加の機会を与えて下さった馬場先生に感謝いたします。

生駒山のふもとの小さな市の一角でヘルパーステーションの管理者をしている建築屋の私としてはすべてが新鮮でした。



(デンマーク・Bilde さん宅)

イギリスでは、私と同業の住宅改修エージェンシー社長さんから受けた施工工法・施工費等（制度の違いはありましたが）のお話は非常に興味深いものでした。デンマークでは、前回と同じ通訳のブンゴード孝子さんから、5年間の変化も伺いながらの説明に聴きいってばかりでした。

これらの内容は、既にそれぞれの専門分野の参加者から詳細にわたり報告されていますので、私は、番外編の自由視察について簡単に感想を書いてみます。

イギリスでは、自分の行きたいミュージカルを決めて自由に見に行くことになりましたが、結局はライオンキング(Lion King)とリトルダンサー(Billi Elliot the musical)の2組に分かれました。私は英語がわからなくてもなんとなくストーリーがわかるということでリトルダンサーを見に行きましたが、主役の少年の上手なこと！ 感激して宿泊しているホテルに戻ると、ライオンキングを見てきた人もものすごく感激していて、年甲斐もなく2組で、すばらしさのバトルをしてしまいました。とにかく、「本物はすごい!!!」の一言でした。

デンマークでは、Bilde さんというご夫妻のお宅を訪問させていただきました。首都コペンハーゲンから電車で約3時間半くらい離れた町でしたが、Knud Bilde というご主人のおだやかさと、Maria Louise Bilde という奥様のやさしさに接し、デンマークの住まいと環境のすばらしさと、なによりもその生き方や暮らし方に、ほんのわずかな時間でしたが、感動しました。特に老人の部類に入ってきた私にとって考えさせれる一日であったと同時に、おそらく今後の残り人生の指針になるだろうと思っています。

5年前の視察の時もそうでしたが、今回も自分の中にしっかりと、この10日間が刻まれました。私は、この刻まれた内容を残念ながら文章に表わすことができません。実際に参加して思うことはたくさんありますが、私の能力では皆さんにお伝えできません。どうもすみません。でも、とつてもとつてもすばらしい10日間であったことだけは、ここに記しておきたいと思います。ありがとうございました。

## 20、 感 想 文

森永 憲治

まず始めに、今回の視察のお礼を申し上げたいと思います。馬場先生、誘っていただきまして誠にありがとうございました。そして、馬場先生並びに参加者全員に、大変お世話になりましたことを深く感謝しております。

視察では本当に多くのことを学ぶことができました。生活面で印象を受けたのは、福祉用具センターには、様々なガーデニング道具があり、庭や植木を手入れすることを楽しんでいる人が多いこと、それとどの部屋にも自分の好きな家具があり、素敵な住空間になっていたことです。日本でも住環境や生活に興味を持ちながら楽しめるようにしたいと思いました。

仕事現場では、OTの活躍を始めとして、皆さんが誇りと自信を持って働いているというのが印象的でした。日本で介護や医療の現場は大変だとは聞いていましたが、ここでは、ただ大変というわけではなく、やりがいを持てる仕事であり、働く側の体も大事にしなくては行けないというのを、周囲が理解している風土だということです。その理解を勝ち取れたのは、皆が職場・職能の立場や意義を、自分たちで変えていこうという努力があったからだと思いました。

向こうで出会った方々を通して魅力的だと感じたのは、団体の理事として政治と闘っている親、親しげに話をしてくれる入居者、人と接するのが好きな障がいを持った人達でした。良い住宅があるから、生活が良くなり、自分の居場所も安定し人格が良くなっていくのではないか、それを手に入れるのが人間の当然の権利であるように感じました。

制度の話では、始めからこうであったのではなくて、苦労を積み重ねてきたからこそ今があるのだと感じました。日本も今は苦労をしなくては行けないですが、将来必ず北欧に続いて、ひとりひとりが生きることが、心から幸せに感じることができるよう、絶対にできるはずだという前向きな確信と激励をもらいました。

私は今回記録係として同伴させていただきました。とても緊張しましたが、この視察中皆さんからずっと支えて頂いたおかげで、帰国頃には10数人の新しい親・兄・姉ができるくらい意義深い視察となりました。帰国後に思うのは、世界中に福祉・医療・建築の連携について興味があり、社会を変える意気込みを持たれて闘っている同・異世代の仲間・友人・戦友がいることはとても素晴らしいということ、そして学生として参加することができたのは全て親のおかげであることへの感謝です。

最後にどこまでも激励・指導をして頂きました馬場先生始め皆さんに感謝を申し上げます。本当に有難う御座いました。

## 21、公共空間などのトイレ<写真集>



図 21.1-2 イギリス、ケンジントン&チェルシー区ソーシャルサービスセンターのトイレ



図 21.3-4 ウィリアムモリスのレッドハウスのある郊外の駅とその男子小用



図 21.5-7 ロンドンのターミナル駅のトイレ 新しい駅のステンレス壁、他は少し古いもの



図 21.8 これは大英博物館のトイレ

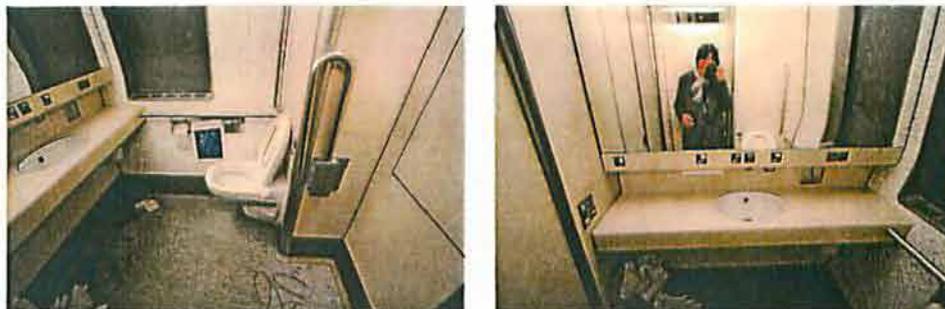


図 21.9・11 デンマーク、空港からコペンハーゲン中心部に向かう列車の車いす対応のトイレ 隣には授乳室もあった



図 21.11-13 これも座席指定で長距離乗った列車のトイレ 最寄りのトイレが、このトイレだった



図 21.14-15 小さな駅、バス停近くの待合室兼トイレ



図 21.16・18 カフェテラスでの昼食に立ち寄った、グリブスコウ市の高齢者ケアセンターのトイレ エントランスまわりの廊下を広げるため、台形の平面になっている



図 21.19-21 ヒューズホルム市判定委員会に訪問のトイレ



図 21.22-27 帰国して中部空港のトイレ

障害者用はオストメイト対応、一般向けも広く、折れ戸装備、車いすでも使えるかも。日本の新しいトイレは思いのほかいいのかも。

## 22、住居のバスルーム<写真集>



図 22.1-3 ロンドン、オクタビア住宅協会の高齢者住宅、ジェームスヒルハウスのバスルーム  
ドアの正面に洗面台、左にトイレ、右はカーテンがかったシャワー室



図 22.4 クエストデイセンターの給湯タイプの浴槽、  
給排水の待ち時間があり評判は今ひとつかも



図 22.5-6 スティーブさんの改造事例 介護者が濡れずに済むための低い間仕切り  
同様の間仕切りは、福祉用具センターDLFの展示物にもあった。(右)



図 22.7-9 アスロンハウスリハビリセンター



図 22.10-11 訪問した個人宅のゲストルームのバスルーム  
洗面、トイレとシャワーユニット。  
車いす対応でなければこれがレギュラーなタイプか。



図 22.12-13 ルンビュートーベック市高齢者統合センター 築後 25 年の住戸

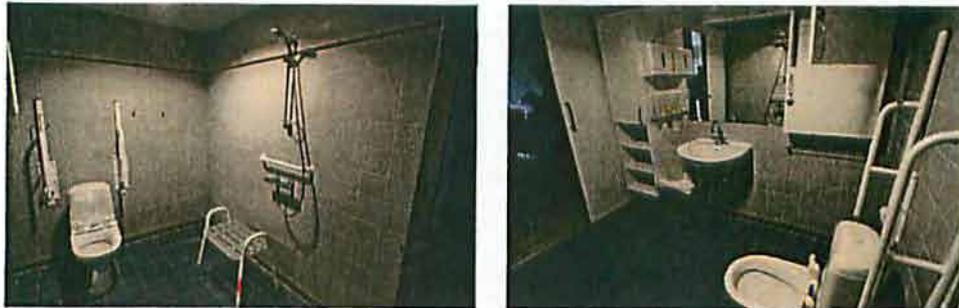


図 22.14-15 2 年前に建てられた建物、夫婦用の住戸の空き部屋のバスルーム



図 22.16 同じ建物、単身用の住戸



図 22.17-19 グリブスコウ師の新しい重度障害者住宅の浴室

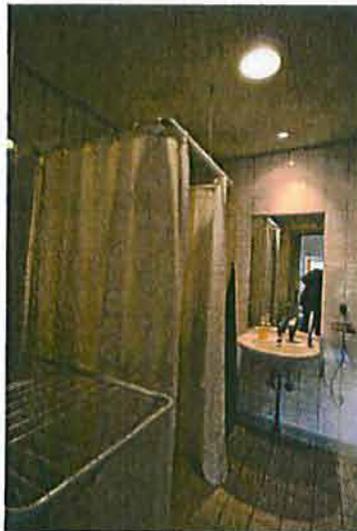


図 22.20-21 同じ障害者住宅の浴室、シャワーカーテンがある

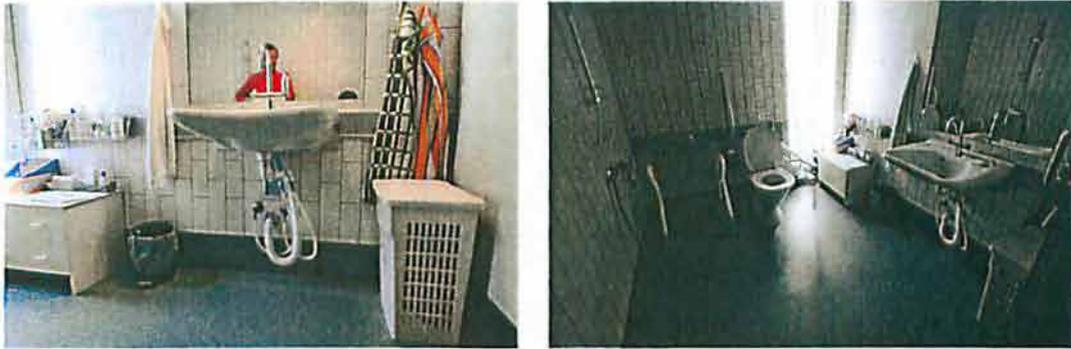


図 22.22・23 ゲントフテ市の高齢者統合センターの住戸の浴室

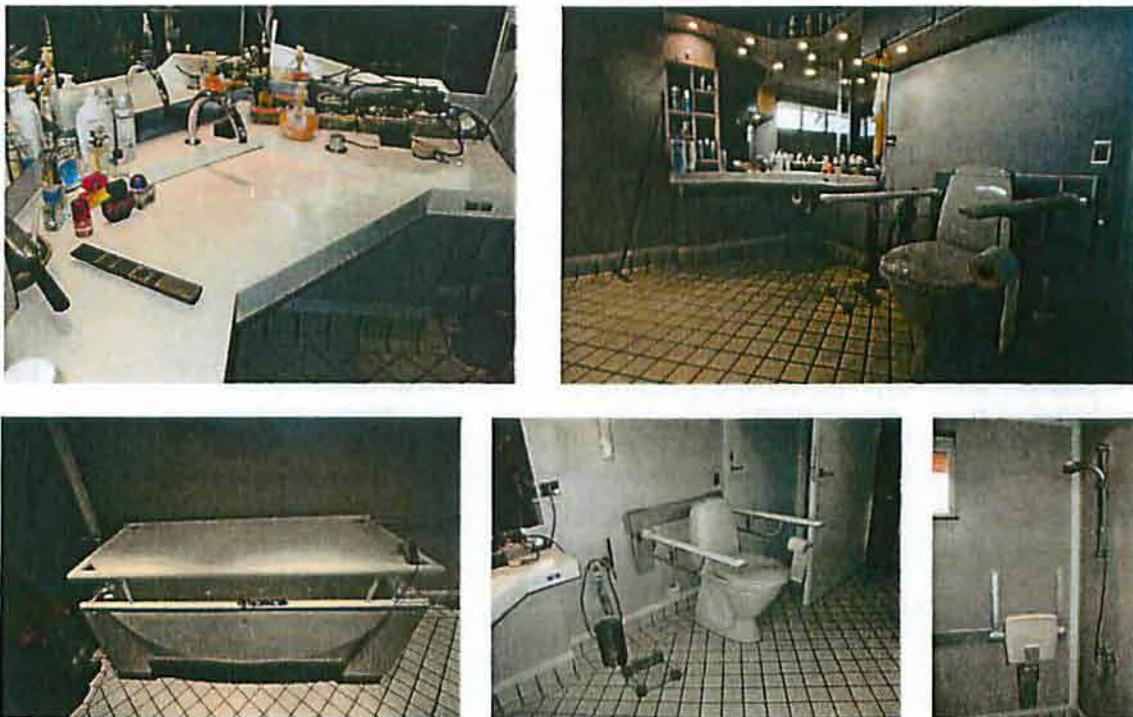


図 22.24・28 カトリーヌと両親の家のカトリーヌの浴室

昇降機能を付けた洗面台、跳ね上げ手すりも、シャワーチェアも取り付け位置を調整出来る。立ってシャワー、シャワーチェアでシャワー、リフトを使うことも含め、いろんな入浴スタイルに対応。

## 参加者名簿

	氏名	所属組織・部署	部署・役職	職能
1) 団長	馬場 昌子	関西大学	環境都市工学部専任講師	建築
2)	馬場 健一	馬場健一建築研究所	代表	建築
3)	石山 満夫	(株)石山商店	取締役	OT
4)	小林 貴代	Koba レディースクリニック	理事	OT
5)	眞銅 恵	社会福祉法人悠人会介護老人保健施設ベルアルト	リハ科	OT
6)	大徳 育代	(有)ダイトク サン介護サービス	取締役	介護
7)	千原 美穂子	整体セラピスト	学生	セラピスト
8)	萩原 美智子	大手前短期大学	ライフデザイン総合学科 准教授	建築
9)	馬場 麻衣	福井大学大学院	博士後期課程 学生	建築
10)	細本 愛子	千里津雲台訪問介護ステーション	作業療法士	OT
11)	森永 憲治	関西大学大学院	博士前期課程 学生	建築
12)	山田 博司	(有)ケアフレンズ	専務取締役	建築介護

編集発行：NPO 福祉医療建築の連携による住居改善研究会

<http://www7.ocn.ne.jp/~fukuiken>